

《もくじ》

- 特集:第28回水郷水都全国会議大会in津南
~雪と湧水の「縄文の里」で水環境を考える
2頁・日本名水百選「龍ヶ窪」の保全活動
.....内山 緑(正会員)
- 4頁・雪国の住宅と環境
.....小林 幸一(正会員)
- 6頁・全原発を即時、廃炉にせよ!
.....近藤 容人(飯羽村村議会議員)
- 9頁・ご一緒に活動しませんか

奔流

《第9号》

- 発行
千曲川・信濃川復権の会
〒184-0012
東京都小金井市中町2-5-13
FAX・TEL 042-381-7770
- 発行人・根津 東六(共同代表)
- 編集人・矢間秀次郎(共同代表)
- 〒振替・00120-0-710488

題字揮毫・梅原猛

大河の一滴 (9)

行政に頼らない過疎集落の村おこしの知恵

― 廃校の危機から目覚めた自治意識 ―

笠原 崇寛(正会員・ジャーナリスト)



年金不安や景気低迷など、すべての問題は人口減少と少子高齢化に行き着く。

特に地方の過疎化・高齢化は深刻だ。ところがユニークな取り組みで過疎化・高齢化に歯止めをかけた場所がある。徳島県海部郡美波町にある漁村、伊座利地区だ。

三方を山に囲まれた陸の孤島とも呼ばれる交通不便な場所。平地は少ないため農業はできず、産業は漁業のみ。最盛期には400人いたが、都市に移住する人が増え、人口は100人に減少。1994年には高齢化率(65歳以上の人口割合)が44%になった。50%を超えると限界集落となる。年々子供も減り、1996年には集落にある小中学校の生徒数は10人に。このままでは廃校になってしまふ。「学校がなくなったら、ますます過疎化が進み、集落は終わってしまう」と住民は危機感を募らせた。行政に陳情したが、財政が乏しく、何の対策

も行われなかった。

ここまではよくある話だが、ここから違う。伊座利の人たちは「いつまでも行政に頼ってはダメだ。自分たちで行動しなければならぬ」と考え、全住民が参加する「伊座利の未来を考える推進協議会」を結成。「学校の灯火を消すな」を合言葉に、自分たちでできる地域活性化策を考え始めた。そこで生まれたのが「漁村留学制度」だ。

過疎地区では人口を増やそうと、優遇措置を設けるなどして移住を促進する。しかし移住はハードルが高すぎ、現実的ではない。そこで考えたのは、移住ではなく、数年間だけ「留学」してもらおうというものだ。伊座利では1999年から「おいでよ海の学校へ」という1日漁村留学体験イベントを行っていた。川遊び、磯遊び、漁体験など、都市の子供たちに自然にふれあう機会を提供し、人氣となっていた。これを発展させたのが「漁村留学制度」だ。

「子供が小さいうちは豊かな自然の中で育てたい」というニーズを汲み取った

結果、都市部から数年間だけ子供を連れて移住してくる家族が増え、2004年には小中学生の人数が従来の2倍の20人にまで増え、廃校の危機をまぬがれた。人口も約130人まで増えた。以後もこの人数を維持している。

ただ、やみくもに人数を増やすことに熱心になっているわけではない。「留学」希望の家族を住民が面接し、時には断ることもある。「のどから手が出るほど子供がほしい。でも無責任な親を受け入れたら、人口は増えてもコミュニティが維持できなくなってしまう」と伊座利漁業協同組合の組合長・吉野清さんは語る。あくまで目指すのは地区の持続可能な発展であり、数字を増やせばいいという成長至上主義とは一線を画す。

こうして伊座利の高齢化率は20%台にまで低下。奇跡の復活劇を遂げた。全国から視察希望が殺到しているが、平日、公費で視察に来る人は原則断っている。「自腹で休日に視察に来るぐらいの意気込みがなければ地域活性化はできない。政治や行政に頼る意識からの脱却が活性化への第一歩」(吉野さん)。今、日本に必要なのは、この地区に息づいている自治の精神だと感じた。
*主な著書『検証・新ボランティア元年―被災地のリアルとボランティアの功罪』(共栄書房)、『かさマカジン』(発行人)。